

相談支援係
072-941-3365

情報チーム
072-943-5785

研究研修係
072-943-5784

教育センター
Web page は
こちらから



『そだちのねっこ』

～乳幼児期の遊びより～



【「Bくんに頼もう」「ええで！」

～友だちの得意やよさを遊びの中で活かすわけ～】

5歳児の様子

12月12日（木）、5歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。

自然物を使ってミニクリスマスツリーや、壁面ツリーのオーナメントを作っている子どもが多くいました。自由に使える『材料ワゴン』には、花や枝、実などの自然物やモールや綿、キラキラな素材があり、選びやすいように、また、片付けしやすいように整理がされていました。



「これどう？」「ん～、僕はこっちにしようかな？」「それもいいね！」

「私も同じのにしようかな？」と、遊びの目的をもち、楽しそうに素材を選んでいる様子がありました。

テーブルでは、毛糸を綺麗に巻き付けようと集中していたり、自分の作っているものを見せ合って「いいね～」と笑い合ったりしていました。そして、保育室の片隅には、絵本が読めるスペースもあり、暖かな日差しを受けながら、好きな絵本を読んだり、時々近くの友だちと会話をしたりしていました。

そんな中、広告紙でくるくる棒を作り、それをハサミで切ろうとするA児がいました。

A：「硬った～。切られへん」「Bくんに頼もう！」

保：「なんでBくんに頼むの？」

A：「だってな、Bくんは力が強いねん」

保：「なるほどね！」

A：「Bくん、これ切られへんねん。切ってくれる？」

B：「ええで。せやけどほんまに、これ硬すぎやん」

A：「せやろ。めっちゃ細く硬く作ったからさ～」

保：（やりとりを見て、子どもたちだけでは難しいと判断し、少し切れ目を入れ、再びBに渡す）

B：「いけそうや！切れた！」

A：「おお！さすがBくん。ありがとう！これでピザひっくりかえすやつ作れるわ」

B：「Aくん、ピザのやつ作ろうと思ってたんや！」

その後、【ピザをひっくりかえすやつ】を完成させたA児が、「できたで！」とC児に渡し、ピザ屋の遊びが再開していました。すると、



「何してるん?」「僕たちも入れて!」とD児、E児も加わり、楽しそうな遊びから友だちの輪が広がっていました。

得意なことやそれぞれのよさを認め合う友だち関係と、それをそっと支える保育者のかかわりが、一人ひとりの自己肯定感にもつながっていることがわかりました。

やりたいことができる時間の中で、子どもたちは自分で考えたり、試したりすることを繰り返します。また、保育者や友だちと協力したり、相談したり、共感したりして、遊びや生活を充実させ、心を満たしていきます。その経験を積み重ねることは、「やってみようかな」という気持ちにつながり、遊びや活動に対する興味ややる気（意欲）となっていきます。これらは非認知能力であり、保育者（大人）から指示され、遊ばされているだけでは育ったり身についたりするものではないと思っています。

『好きなこと』ができる場、時間があるとともに、それを認め合えるクラスの雰囲気、友だちの存在、保育者（大人）のかかわりも重要になります。

そして、子どもたちの得意やよさを遊びの中で活かすことは、5歳児の発達段階に適した遊びや少し難しさを入れたりして、その過程を楽しんだり、達成感を味わったりしてほしいという保育者の願いも含まれています。

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】では、『健康な心と体』『自立心』『協同性』『社会生活とのかかわり』『思考力の芽生え』『言葉による伝え合い』『豊かな感性と表現』と関連していることがわかりました。さらに、『遊びは学び 学びは遊び “やってみたいが学びの芽”』がわかるエピソードであるとも思いました。



幼児教育研修＜特別支援教育コーディネーター研修（就学前）②＞



↑ 研修資料の一部

令和6年12月2日（月）午後3時～午後5時に幼児教育研修＜特別支援教育コーディネーター研修（就学前）②＞を本市水道局大会議室で行いました。講師は本センター所長補佐の 天野 千晶 で、研修（グループワーク）のテーマは「①就学前施設における特別支援教育コーディネーターとしての取り組みを振り返って～八尾市がめざすインクルーシブ保育とは～ ②アセスメントに基づき、インクルーシブな支援方法を保育の中で活かすために～事例を使って多様な意見で学び合う～」です。

＜受講者感想＞

- ・他園の先生方の取り組みや工夫を聴くことで、刺激を受けるとともに、励まされた気がする。特別支援教育は専門的な知識も必要なので、今後も勉強を続けていきたい。
- ・グループワークの多い研修だった。グループ内での話し合いの進め方も、うまくいったりいかなかったりした。他のグループの手法なども参考にしながら、園内でも建設的なグループワークを行ってきたい。
- ・他の園でコーディネーターをしている先生方との話し合いをする中で、共通の課題や悩みがあることが分かった。また、「インクルーシブ」と言っても、人によってその意味合いが変わってくることがあるので、まずは自分の中で考えをまとめ、深めていきたい。

通級指導教室公開授業研修会③

令和6年12月2日(月)午後3～午後5時に通級指導教室公開授業研修会③を行いました。講師は発達支援ルームまなび 今村 佐智子 理事で、八尾小学校の実践報告について、参加者のグループ討議と講師による指導・講評をいただきました。

＜受講者感想＞

- ・気持ちを落ち着ける時間を学習の課題設定にされているのが良かった。自分は、マインドフルネスを取り入れているが、座禅のようなスタイルも良いと思った。どの取り組みも、目標がはっきりしていて良かった。
- ・授業のルーティーン化を意識していることが伝わってきた。気持ちの切り替え、集中という意味で、落ち着ける活動を私も取り入れてみたいと思った。教室の掲示物やパーテーションでの区切りなど、集中しやすい環境を整えているのが良かった。
- ・クラスの中で、わからないところを質問できずに、答えだけ写している子の話では、思い当たる子がいる。通級にきたときに、「ここがわからなかった」と言えるようになったので、これからは学級の中で、わからないことを聞けるようになっていけるようになる手立てを進めていきたいと思った。ICTの活用があまりできておらず、言葉の意味を確認したり、実際の画像を見せたりするのに使っているが、ICTのメリット、デメリットについて確認できたので、それを考えながら有効に活用していきたい。

「体育」授業と講演

**ネット型 プレールボール
主なルール**

人数: 1チーム3人(もしくは4人)

コート: バドミントンコート(10m×3m)

ネット: ネットの高さは40～50cm程度
(ラリーが期待できる高さに調整)

用具: やわらかく弾力性のあるボール



ゲームの進め方

- ・1人1回のプレーとし、3回目で相手に返球する。
- ・ゲームの開始は、サーブとする(サーブは交互に行う)。
- ・サーブは、自陣に一度ボールをバウンドさせ相手コートに打ち込む(投げ入れる)。もしくは、相手コートにそのまま投げ入れる

令和6年12月3日(火)午後2時20分～午後5時に「体育」授業と講演を八尾市立曙川東小学校で行いました。これは、教育センターと八尾市教育研究会(体育部会)との連携によるもので、授業者は曙川東小学校の 松村 祐貴 教諭(6年担任)で、授業テーマは『見方・考え方を働かせて課題を見つける授業づくり～プレールボールを通して～』です。講師は大阪体育大学 小林 博隆 准教授で、研修テーマは「主体的・対話的で深い学びの実現に向けたICT活用のポイント」です。

研修資料の一部↑→

＜受講者感想＞

- ・プレールボールを初めて見る事ができた。ボール運動が得意な児童も、苦手な児童も、楽しんでできるスポーツだと思った。
- ・児童が考えを深める手立てとして、ICTを利用して動画を撮ったり、その動画や図に書き込んだりする方法を取り入れてみたいと思った。
- ・ご講演の中で一番心に残っていることは「どんな体育の授業が嫌か」という言葉である。これは体育だけでなく、他の授業でも言えることだと思う。授業を考える際に心に留めて考えようと思う。

認知的学習場面 グループミーティング、ノート記入

ノート記入: 目標や感想など

ポイント

- 目標に対応した学習内容が
- 学習内容を学習者が理解しているか
- 学習量は適切か
- ICT機器の操作に慣れているか

例: タブレット

1. 何のために使うのか(目的)
2. いつ・誰が・どのように使うのか(頻度、教師が生徒、頻度、座席位置など)

タブレットを活用した話し合い

Information and Communication Technology
(情報通信技術)

1. 病気の子どものための教育制度

病気等により継続して医療や生活上の管理が必要な子どもに対して、必要な配慮を行いながら教育を行っており、病院に隣接又は併設されている学校が多くあります。また学校と離れた病院においても、病院内に教室となる場所や職員室等を確保して、分校又は分教室として設置したり、病院・施設、自宅への訪問教育を行ったりしています。



令和6年12月3日（火）午後3時30分～午後5時に内容別特別支援教育研修Cを行いました。講師は大阪府立羽曳野支援学校 上尾 紋加 教諭と 橋本 麻帆 教諭で、研修テーマは「病気の子どもへの支援」です

研修資料の一部

＜受講者感想＞

- ・支援学級の担任をしている。起立性調節障がい生徒や愛着障がい生徒など、色々な生徒がいる。「立派な大人にするのではなく、仲良くできればそれでいい」という言葉をいただいて、改めて生徒への対応や声掛けなど考えていきたいと思った。
- ・子どもたちの学ぶ権利を守るために、ケースに合わせた配慮がたくさんあることを学び驚いた。今後も、広い視野を持って学んでいきたい。
- ・研修終了後、講師先生とお話をしている中で、「病気ではなく、その子の”パーソナリティをみてあげて”」と言われたことが印象的で、ハッと自分の言動を振り返るきっかけとなった。さっそく、明日、自校の教職員と共有したいと思う。

「国語」授業と講演



令和6年12月5日（木）午後1時40分～午後5時に「国語」授業と講演を行いました。これは本市研究協力員「国語」部会との連携で行いました。授業者は高安小中学校（前期）瀬田 貴生 教諭で、テーマは「主体的・対話的で深い学びをめざして～『楽しい』『表現したい』と思える単元展開の研究」です。講師は岡山理科大学 正木 友則 准教授で、研修テーマは「授業展開の工夫について」です。

←研修資料の一部 授業で制作したすごろくです。

<受講者感想>

- ・瀬田先生の授業は、子どもたちが「したい」と思えるような仕掛けがたくさんあった。単元全体を見ても、挿絵を比べたりすごろくを作ったりと工夫がたくさんあり、勉強させていた。子どもの実態に合わせて自分の授業でも取り入れていきたい。
- ・瀬田先生の授業構想や準備に改めて尊敬の念を抱いた。子どもたちが楽しく学びを進めていけるような手立てと、学級を包み込む雰囲気や両輪となり、素敵な時間だった。
- ・正木先生の講演はわかりやすく、おもしろく、学びがたくさんあった。特に「お手紙」の授業展開の例では「そうすれば、子どもたちは主体的に学べるのか」と納得させられた。学んだことを授業づくりに活かしていきたいです。

幼児教育研修<保育のための基本研修②>

2. 指導目標をはっきりさせましょう。

何を教えるのか？何を学ばせるのか？指導目標をはっきりさせましょう。

♪音楽の基礎基本はいつ教えるの？

音楽の基礎はすべて感覚です。「リズム感」「音感」「テンポ感」「フレーズ感」「和声感」の五つの感覚です。最初は「リズム感」を育てますがリズムが上手なだけでなくても拍を感じれば良いと思います。

↑ 研修資料の一部

「日常の遊びから始まる弾む音楽遊び～遊びから始まる心が弾む音楽遊び～」です。

令和6年12月5日（木）
午後3時～午後5時に幼児教育研修<保育のための基本研修②>を本市安中ひかりこども園遊戯室で行いました。講師は音楽グルメの会 久保修三 代表で、研修テーマは

<受講者感想>

- ・リズム感をはじめ、音楽を楽しむための感覚を育む方法や、子どもとの接し方などを学ぶことができた。発達段階に応じて、つけるべき時につけるべき力をつけることの大切さを改めて感じた。また、言葉では伝えにくい「拍を感じる」ということについて少し手掛かりが得られた気がする。
- ・普段の保育の中で歌う曲は童謡や季節の歌等が多いが、実際子どもたちが口ずさんでいるのは流行り歌が多い。今回の研修で「好きな音楽を聴いたり歌ったりすることで音楽性が広がる」と仰っていたので、流行り歌なども積極的に取り入れて、子どもたちの感性を育て、楽しい気持ちを増やしていきたい。
- ・時代の変化を十分受け止めて、ピアノでのリズム遊びだけでなく様々な方法も用いて取り組んでいきたい。指導するのではなく、子どもたちが自ら感じ考えて取り組めるようなリズム遊びができるようになりたいと思った。

通級指導教室公開授業研修会④

令和6年12月6日（金）午後3～午後5時に通級指導教室公開授業研修会④を行いました。講師は発達支援ルームまなび 今村 佐智子 理事で、八尾中学校の実践報告について、参加者のグループ討議と講師による指導・講評をいただきました。

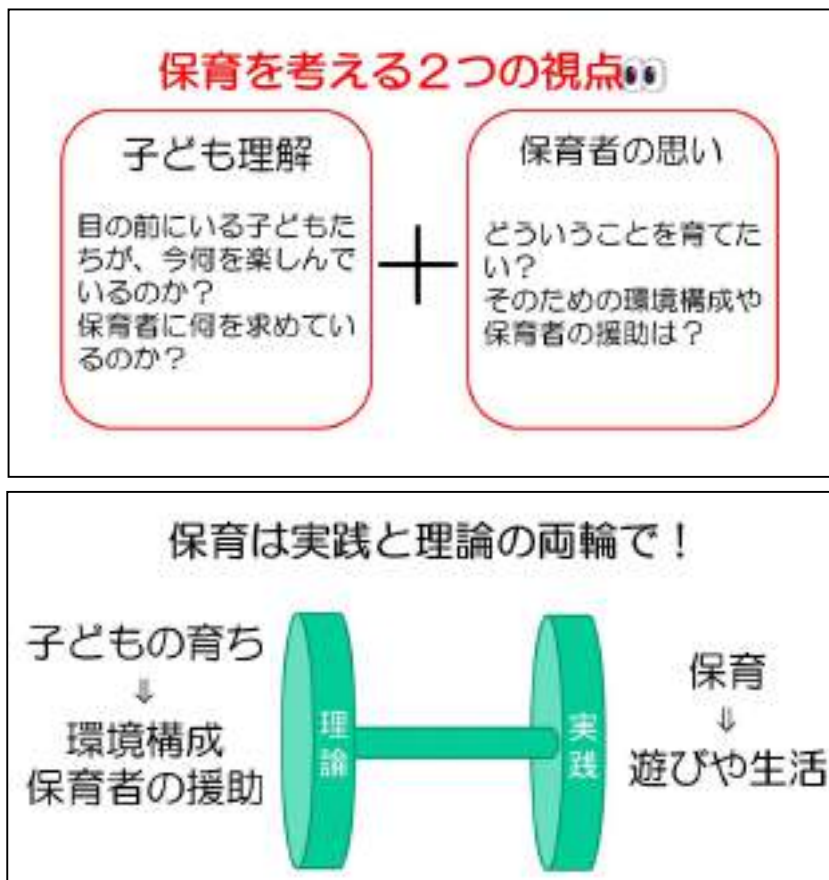
<受講者感想>

- ・他校の先生方も同じような悩みをお持ちだということがわかり、安心するとともに、元氣と勇気をいただいた。自分の中で「これでいいのか？」「他の方法は何があるかな？」など、悩みながら通級担当をしている部分がある。こうして授業を（動画で）見せていただき、悩みや実践内容を共有できたことは、大きな励みになる。報告校では、生徒の状況を大切にされているのが印象的だった。生徒の好きなことを教材にし、興味を持って取り組めるようにされているのは私も取り入れていきたいと思った。
- ・しゃべる時間と書く時間をはっきり分けることが重要であると感じた。生徒にとって苦手な

ことと得意なことを交互に配置する方法は、すぐに調整できそうだと考えている。また、なぞる練習の意義についても勉強になった。自校の通級のみならず、巡回先でも生かしていきたいと感じた。

- ・「どんな自分になりたいか」自己実現を大事にしていくことを今後も意識して、指導していきたいと改めて思った。本人の好きなことや得意なことを上手く活かしながら、「なりたい自分」につなげていく指導をしていきたい。今回の見せていただいた授業では「先生が挙げてくださった好きな映画の言葉に興味をもつ」→「自分も今後興味を持って映画に出てくる言葉を聞く」→「自分の好きな言葉を見つけられる」→「なぜ好きかを説明できる」というところへ結び付けていけるような授業を自分も実践していきたい。

幼児教育アドバイザーによる企画研修



令和6年12月13日（金）午後3時～午後5時に幼児教育アドバイザーによる企画研修を行いました。講師は八尾市の幼児教育アドバイザー4人です。

←研修資料の一部

<受講者感想>

- ・今日の研修で、理論と実践を詳しく学ぶことができた。これらを両輪ととらえ、今後の保育に活かしていきたい。
- ・保育について迷ったり悩んだりしたときは、他の職員の意見を聴いたり、アドバイスをもらったりして、できるだけ個に応じた保育をするように心がけていきたい。
- ・話し合いを通じて、自分の考えが正しかったことが確認できたり、至らなかった考えを補ったりすることができた。

教育センター「情報公開コーナー」

教育センターB棟（東側）の2階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も2週間の貸し出しを行っております。今回は12月から1月に配架した雑誌の誌名と目次の一部を紹介いたします。

「こころの科学」（日本評論社）1月号

・特別企画 生きづらさと犯罪 新たな支援に向けて

「月刊学校教育相談」（ほんの森出版）1月号

・特集1 体験格差へのアプローチ

どの記事も体験に「格差」がある、ということが前提です。実際にどの程度の「格差」があるのか、「格差」があると何が問題なのか、「格差」の原因は何なのか、ほとんど触れられていません。ここでは、「体験格差」を乗り越えるための手法を「アプローチ」として紹介しています。中でも「豊かな食の体験が『自分事』の始まりになる」というタイトルの記事は興味深く拝読しました。筆者の 松本 恭子 さんは東京都東久留米市第九小学校主任栄養教諭です。食の「体験格差」が生じる原因としては「保護者の忙しさや経済状況、食に対する価値観の変化」などをあげておられます。学校給食に関わっておられる筆者としては「栄養価のバランスはもとより『豊かな食を子どもに』」という思いを持っておられます。家庭の食には「偏り」があるものですが、それらを否定的にとらえるのではなく、「食の豊かさ」に焦点をあてたポジティブなアプローチが大切だと述べられています。子どもは初めての食べ物には「新奇性恐怖」を感じるものらしく、それが「食べず嫌い」を生むことにつながるそうです。そこで筆者は、学校給食の場面で「一口チャレンジ」を行い、そこから「食べず嫌い」を克服するチャレンジを子どもたちに指導しておられます。それでも最後は子ども自身が「主体的」に食べることで、チャレンジは完結します。筆者は複数の教科の学習とも関連付けて食の体験を提供されています。道徳科では、丸ごと一本の鮭を用意して、子どもの前で切り身になるまで解体するという授業をされています。この授業（体験）を通じて、「いのちをいただく」ということについて「自分事」としての考えることができるようになる子どもが多いそうです。（葭仲）

・特集2 目標に向かって「やり続ける力」を育てる

「指導と評価」（日本教育評価研究会）1月号

- ・特集1 令和6年度全国学力調査の分析
- ・特集2 教育虐待

「虐待」という言葉は残念ながらよく耳にします。しかし「教育虐待」となると耳にすることは少ないでしょう。上級教育カウンセラー・元東京都公立小学校長 谷戸 玲子（やとれいこ）さんは、この問題について「学校は何ができるのか 一学校を保護者が立ち止まることのできる場に」と題して記事を寄せられています。「子どもの表情が気になり、教師が保護者に声をかけても、それがその家庭にとっては当然の生活スタイルであると言われると、納得はできなくてもそれ以上のことは言えない。」とのこと。また「『子どものため』という信念を固めて、一方的にひたむきになることに価値をおく保護者に子どもの状態の危機を伝えても、目の前の子どもの危機は救えない。」とも述べられています。「孤立しがちな家庭の問題」であり「相談案件にのらないことが多い」ことから、「教育虐待」は見えにくくなります。そもそも「教育虐待」は「教育熱心な親などが過度の期待を子どもに負わせ、親の思うように学力などを上げようとする」と定義されているとのこと。学校など外部から指摘されると、保護者は隠蔽するようになり、問題はより見えにくくなります。どこからが「教育虐待」に当たるのかの判断は難しいようですが、「子どもが耐えられる限界（受忍限度）」を超えて教育を強制すれば「教育虐待」に該当するとのこと。筆者は学校での事例を2件紹介されています。ひとつは、祖母の圧力によって、母親が子どもに勉強を強制した、というものです。この場合、子どもの悩みを聞き取れた担任と校長が間に入り、家庭の状況は改善したそうです。もうひとつは、小学校受験に失敗して、中学校受験で挽回すべく子どもに勉強を強制したというものです。結局、学校は介入できず、第三志望の中学校に合格したそうです。それでも、子どもは楽しい中学校生活を送ったとのこと。次に筆者は「エデュケーション・マルトリートメント」に言及されています。「大人が子どもを育てるために役立つ行為だと信じているか、一時的にやむをえないことだと考えているか、そうする以外に方法を知らない、あるいはないと思い込んでいる行為であり、子どもへの共感性が不足し、人権を尊重しない行為である。長年、文化に組み込まれ頻繁に見られる

ため、行為の侵襲性に気づくことはむずかしい。」と述べておられます。さて、このことに関して学校は何ができるのでしょうか。筆者は「無我夢中に突き進む保護者が立ち止まることのできる場所が学校である」と考えておられます。「子どもの自由が保障され、子どもが反抗心や疑問を表現できる学校でありたい。」と述べられています。そのためには「コミュニティづくりを意識した学校づくりが求められる。」とされています。様々な考えを持つ保護者がおられる中で、そう簡単なことではないと思いますが、重要なことだと思います。
(霞仲)

「道徳教育」（明治図書）1月号

- ・特集 道徳教育×ウェルビーイング が熱い！

「特別支援教育」（文部科学省編集・東洋館出版社）令和6年冬 No.96

- ・特集 学校教育目標の実現に向けた地域と連携した教育活動

「特別支援教育研究」（全日本特別支援教育連盟編集・東洋館出版社）1月号

- ・特集 子供の学びの質が高まる「できる状況づくり」のすゝめ

「初等教育資料」（文部科学省編集・東洋館出版社）1月号

- ・特集Ⅰ 個に応じた指導の充実②
- ・特集Ⅱ [音楽]音楽科における多様な教育ニーズに応じた指導の工夫

「中等教育資料」（文部科学省編集・学事出版）1月号

- ・特集 [中学校]各教科等を交えて語り合う④～学習評価の充実～

教育科学「国語教育」（明治図書）1月号

- ・特集 徹底研究「海の命」「少年の日の思い出」の授業

教育科学「社会科教育」（明治図書）1月号

- ・特集 対話的な学びを深める！「論争問題学習」成功の極意